

## 国を超えたヨーロッパ<sup>1</sup>における日本語教師会の活動の可能性

鈴木裕子 (マドリード・コンプルテンセ大学)、櫻井直子 (ルーヴェン・カトリック大学)  
高橋希実 (ストラスブール大学)、近藤裕美子 (国際交流基金パリ日本文化会館)  
三輪聖 (ハンブルク大学)

### 要旨

ヨーロッパにおける日本語教師会 (以下、教師会) は、社会と共に多様化する会員の要望に応えるため、情報・実践共有のコミュニティとしての教師会の活動の方向性を考える必要があるだろう。2018年に発足した「日本語教師会 in 欧州」プロジェクトもその観点に立ち、2016年、2017年に教師会会員へのアンケート調査分析を行った。その結果をテキストマイニングの手法で分析した結果、会員の教師会への要望として「情報交換」「ネットワーク」「テーマ」「地方会員/非母語話者」「困難さ」「不足」「スキルアップ」の7つのキーワードが浮かび上がった。これらのキーワードから、今後、国を超えたヨーロッパにおける教師会の活動として、「オンラインで行う目的別教師研修」を提案した。本稿では、プロジェクトの目的、および、一連の活動を概観したのち、2019年度におこなった教師会アンケート実施支援準備、および、オンライン研修会実施準備に関し、パネル発表の流れに沿って報告する。

【パネル1】では、教師会アンケート調査のケーススタディとして、教授対象者の異なるドイツの二つの教師会で調査を行い、テキストマイニングの手法を用いて、それぞれの教師会会員の教師会に求めていることや日本語教師としての意識といった実態を分析・比較した。その結果、共通点と相違点がはっきりと示され、教師会間の協働の可能性が見えてきた。また、ドイツの教師アンケート実施をもとに作成した、「教師会アンケート実施及び分析のマニュアル」も紹介する。

【パネル2】では、国を超えてヨーロッパの教師会ができる可能性として提案した「オンラインで行う研修会の実施」に向けて行ったニーズ調査の分析結果を報告する。そこから、ヨーロッパの日本語教師のオンライン研修に対する意識や要望などを探っていく。

【パネル3】では、パネル2の結果を踏まえ実施したパイロット研修会と事後アンケート結果を報告する。8カ国20名が参加したアンケート結果から、オンライン研修会および教師会に対する期待感、オンライン研修会と従来型の研修会が補完的な位置づけであることが示された。さらに、オンライン研修会の長所と短所、および、テクニカルなサポートの必要性が確認された。実施に関しては、3人のディスカッションに対する親和性の高さ、ファシリテーターの必要性が見てとれ、実際的な点では、休日の午前中の実施、研修との意見交換の場としての放課後の設定が要望として示された。

三つのパネル発表を通して、「日本語教師会 in 欧州」プロジェクトが行っている二つの活動、教師会アンケート実施支援とオンライン研修会の今後の展望と教師同士が国を超えてできる活動の可能性を模索する。

【キーワード】 ヨーロッパ、日本語教師会、教師会支援、ニーズ分析、オンライン研修会  
**Keywords:** Europe, Japanese Language Teachers Associations, Support for Japanese Language Teachers Associations, Needs analysis, Online seminars

## 第一章 「日本語教師会 in 欧州」プロジェクト

### 1 概要 (活動経緯)

日本語教師会の会員は、教師会に何を求めているのであろうか。また、それぞれの立場で日本語教育を行っている会員の実態とはどのようなものなのだろうか。そのような疑問から始まった教師会会員アンケート調査の分析は、それまで漠然としか把握できなかった会員の実態、生の声を聞くことにつながった。年々調査のネットワークは広がり、2018年に発足したプロジェクトチームは、現在、4カ国5名からなり、調査分析から見えてきた結果を基に、現在は国を超えた活動の可能性を検討している。ここでは、プロジェクトの概要とその目的を簡単に説明する。

教師会会員へのアンケート調査は、2016年スペインで行った「学び続ける教師を支える日本語教師会の活動意義—スペイン日本語教師会 (Asociación de Profesores de Japonés en España (APJE)) 会員への質問紙調査を通して—」(鈴木・近藤 2016) にまとめられた調査研究に端を発する。2010年に設立したスペイン日本語教師会では、発足から5年が経過した時点で、今後の教師会の方向性を検討する上で、会員の実態、そして会員の教師会へのニーズ調査をする必要性を感じていた。アンケート調査の回答をテキストマイニング (KH Coder) の手法で分析した結果、発足して間もないスペイン日本語教師会の会員は、即実践でき、明日の授業でつながる研修、活動を教師会に望んでいることが推測され、以後の研修会への指針として役立てることができた。

翌年2017年には、アンケート調査を、教師会歴20年を超えるベルギー、フランス、そして前年のスペインを入れた三カ国で実施し、比較分析を行った。「ヨーロッパにおける日本語教師会が目指すものは何か?—スペイン・フランス・ベルギーの教師会会員への調査を通して見えること—」(鈴木・櫻井・高橋 2017) では、三カ国共通の教師会会員の問題意識として以下のキーワードが挙げられている。キーワード「困難さ」「不足」からは不安定な雇用への危惧が問題視され、「情報交換」「ネットワーク」からは、会員が教師会を自分を磨くための個人成長の場として見ていることがわかった。特に「地方会員/非母語話者」というキーワードから、地方在住、非母語話者会員の教師会への期待が感じられた。そして、「テーマ」「スキルアップ」からは、教師としてより良い授業実践をするためにはどうしたらよいかという会員の問題意識が三カ国共通で見られた。これらの問題意識から、ヨーロッパにおける日本語教師会は国を超えて何ができるかを模索し、その可能性の一つとして、テーマや対象者を特定した「オンラインで行う目的別教師研修」を提案することにした。国を超えて、オンラインでつながる教師研修では、「1. ヨーロッパの教師会のネットワーク作り」「2. 専門性を高める研修会」「3. 対象者別研修会」「4. テーマ別研修会」という四つのポイントを研修会の特徴として挙げている。

2018年には、三カ国の調査を行った3名が発起人となり、「日本語教師会 in 欧州」プロジェクトを立ち上げ、2016年度調査実施のメンバーも加わり、「オンラインで行う目的別教師研修」に向けての中間報告として、「距離を超えた学びの場の構築—「オンラインで行う目的別教師研修」に向けて—」(鈴木・櫻井・高橋・近藤 2018) を発表した。発表では、オンライン研修の定義と形態を整理し、研修会のニーズ調査のための資料として、ベルギー、フランス、スペインで過去に行われた研修実績の分析も行った。

そして、今回、第 24 回 AJE シンポジウムベオグラード大会では、ドイツからのメンバーも新たに加わり、プロジェクトの 2019 年度活動として、『国を超えたヨーロッパにおける日本語教師会の活動の可能性』を報告する。

## 2 目的

第 1 節で、『日本語教師会 in 欧州』プロジェクトの活動経緯を説明したが、その経緯から、プロジェクトの目的は大きく二つに分けることができる。①ヨーロッパ内の日本語教師会の横のつながりを作ること ②ヨーロッパにおける日本語教師会が目指す方向性と可能性を模索することである。本稿では、①を目的とした教師会アンケート実施支援準備の中で、教師会オンラインアンケート調査のケーススタディとして、ドイツの二つの教師会アンケート調査の実施とその分析結果を報告する。また、ドイツでの調査をもとに作成した、「教師会会員アンケート調査実施マニュアル」も紹介する（第二章）。目的②では、オンライン研修会実施に向けて行ったニーズ調査の分析結果と、実際に行った試験的な研修会（パイロット）の実施報告を行う（第三章、第四章）。（図 1 を参照）

《執筆：鈴木》

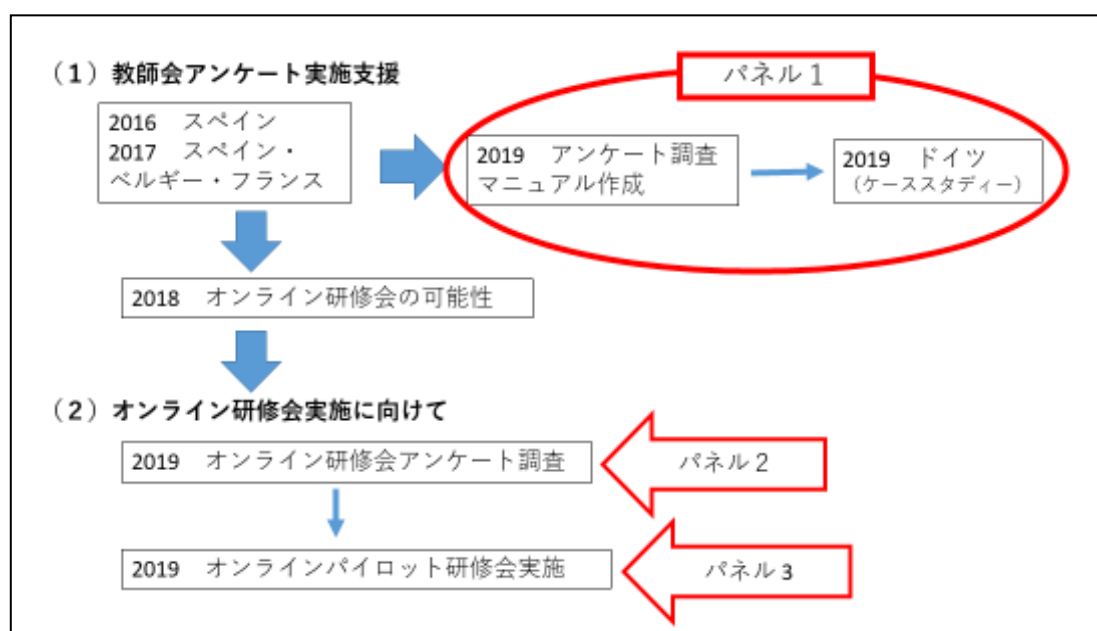


図 1 パネル発表全体の流れ

## 第二章 【パネル 1】

教師会アンケート実施支援－ドイツの教師会会員へのアンケート調査と「教師会会員アンケート調査実施マニュアル」－

### 1 「教師会会員アンケート調査実施マニュアル」

第一章のプロジェクトの概要でも述べたが、2016、2017年に、スペイン、ベルギー、フランスで実施した日本語教師会会員へのアンケート調査では、その分析結果から、

教師会会員の実態、要望、そして、教師会の方向性を示唆するキーワードが数多く検出された。会員の実態、要望を示すキーワードは、各教師会の活動の原動力となり、それをきっかけに新たなプロジェクトや会員のニーズに合った研修会が誕生している。

自国の教師会会員へ教師会へのニーズを知りたいと思っている教師会に、我々が行った調査、そして結果分析のツールやノウハウをマニュアル化したものを提供することを考えた。マニュアル作成に当たっては、過去の調査実施プロセスを基に、今回のドイツの二つの教師会会員へのアンケート調査、分析をケーススタディとした。

### 1.1 マニュアルの目次

「教師会会員アンケート調査実施マニュアル」は、パワーポイント24枚のスライドで、作成分析方法を説明している。以下に概要を示す。



図 2 教師会会員アンケート調査実施マニュアルの表

もくじ

1. オンラインアンケートの作成手順
2. オンラインアンケートの回答
3. アンケート実施説明 (例)
4. 日本語教師会in欧州プロジェクトについて
5. KHCoderの準備
6. インストール
7. KHCoder 起動の方法
8. プロジェクト作成 (テキストファイル作成)
9. 前処理の実行
10. 共起ネットワーク
11. 階層クラスター
12. 図の移動
13. 終わりに

図 3 教師会会員アンケート調査実施マニュアルのもくじ

図 3 の 1 では、Google フォームで作るオンラインアンケート作成手順を説明する。実際に <https://forms.gle/oCHvmU5UFGj3uDMK8> (最終閲覧日: 2020年2月9日) にアクセスすると、アンケートの雛形が添付されている。2 では、回収したオンラインアンケートの集計方法、3 では、アンケート実施を説明する際の雛形を提示している。5、6 では、回答の自由記述部分について、テキストマイニングを用いて、抽出した単語

の相関、出現傾向、時系列から分析していく方法を紹介する。そのテキストマイニングのツールとして KH Coder のインストール、起動方法を説明する。7、8 では自由記述部分のテキストを KH Coder で分析するために必要なファイル作成と分析の前処理の方法について説明し、9～11 では分析方法として利用した共起ネットワークと階層クラスターを紹介するとともに、抽出された語と語（キーワード）を結び合わせて、解釈していく例も提示する。マニュアル作成においては、KHCoder 作成者の「社会調査のための計量テキスト分析」（樋口 2014）と「KHCoder チュートリアル」<https://kncoder.net/tutorial.html>（最終閲覧日：2020年2月9日）を参考にした。

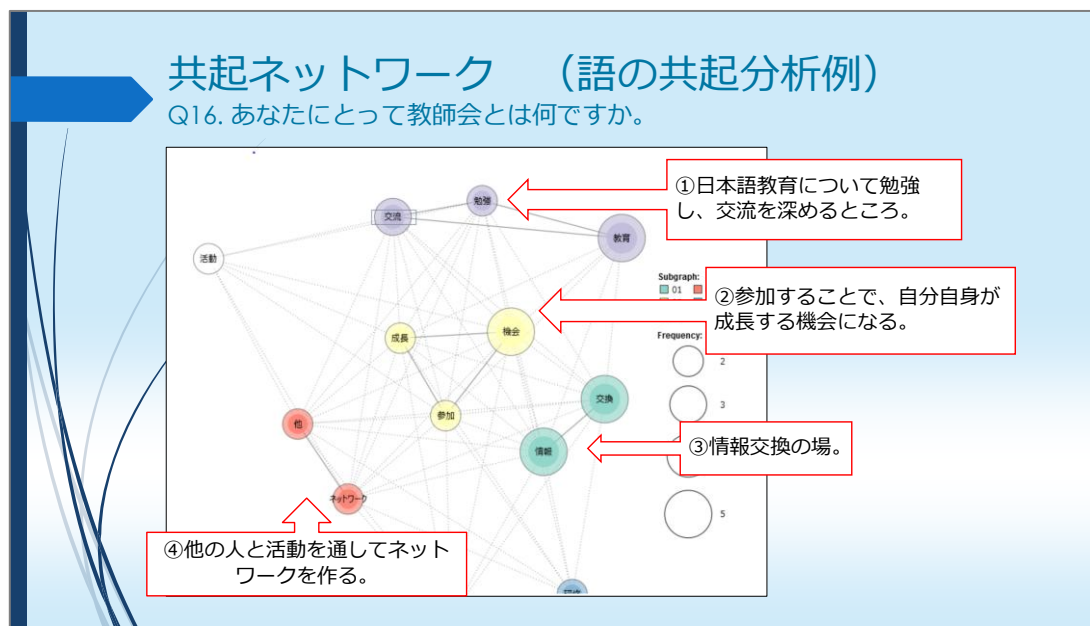


図4 分析マニュアルの一部より

## 1.2 マニュアル作成の意図

今回作成した「教師会会員アンケート調査実施マニュアル」は、自国の教師会会員の問題意識や教師会への要望を知りたいと思っている教師会への支援を目的として作成したものである<sup>2</sup>。

《執筆：鈴木》

## 2 ドイツにおける日本語教師会会員へのアンケート調査の実施

第一節で紹介した分析マニュアルの作成と同時に、ドイツにおける日本語教師会の実態を知るためのアンケート調査を実施した。結果的に本調査は教師会に対するオンラインアンケート調査の一つのケーススタディともなっている。

本節では、ドイツにおける2つの教師会へのオンラインアンケート調査の結果をもとに、それぞれの教師会会員は教師会に何を求めているのか、どんなニーズがあるのか、日本語教師としてどのような教師観を持っているのか、共通点および相違点は何かについて報告し、教授対象者別の教師会の特徴を外観したうえで2つの教師会の横のつながりの可能性を提案する。

## 2.1 ドイツにおける教師会について

ドイツ国内には、図5のように中等教育、高等教育、成人教育と教授対象者別の教師会が三つ存在している。今回の調査に参加した教師会は、高等教育機関の日本語教育に関する「ドイツ語圏日本語教育研究会 (JaH)」<sup>3</sup>と市民大学という成人教育機関の日本語教育に関する「ドイツ VHS 日本語講師の会 (VJV)」<sup>4</sup>の2団体である。

現在、ヨーロッパには約 35<sup>5</sup>の日本語教育関連の教師会が存在するが、教師会のあり方は国によって様々であることが予想される。しかし、2017年に行われたスペイン、ベルギー、フランスの三カ国の調査では、国による違いはむしろ少なく、属性が同じであれば国

が違っていても共通点が多くなることが指摘されている。では、ドイツの教授対象者別で属性の共通性が高い教師会にはどのような特徴が見られるのだろうか。現時点では、国内に教授対象者別の教師会が複数存在している状態で、互いに他の教師会と共に活動することはほとんどないと言える。本稿では、それぞれの教師会の特徴を概観したうえで、教師会としての活動や役割の可能性を探りたいと思う。

	JaH ドイツ語圏日本語 教育研究会	VJS ドイツ語圏中等教 育日本語教師会	VJV ドイツVHS日本語 講師の会
創立年	1994年	1993年	1992年
会員数 <small>2019年1/8月時点</small>	67名	51名	112名
教育機関	高等教育機関	中等教育機関	市民大学 (成人教育)

図5 ドイツにおける日本語教師会

## 2.2 アンケート調査の概要

三カ国の調査を参考に、2018年11月から2019年1月にかけてドイツでオンライン形式のアンケート調査を実施した。質問数は20問あり、「回答者の属性」「日本語教師観、信念、課題」「教師会に対する考え」「ドイツでの日本語教育に対する考え」の4つのパートで構成されている。

表1 教師会会員アンケートの質問項目リスト

Part 1	
回答者の属性	Q1・2 母語・居住地 Q3・4 教師歴・会員歴 Q5・6 教師会参加頻度・関り Q7・8 教育機関・対象
Part 2	
日本語教師観	Q9・10 日本語教師動機・やりがい Q11・12 職場・日本語教育の問題点 Q13・14 研鑽活動・理想の教師

Part 3	
日本語教師会に対する考え	Q15・16 教師会入会動機・教師会の意義 Q17・18 教師会への期待・教師会を通じた自分の変化
Part 4	
ドイツの日本語教育に対する考え	Q19・20 ドイツでの日本語教育の意義・課題

調査対象は調査協力が得られたドイツにおける二つの教師会（「ドイツ語圏日本語教育研究会（JaH）」および「ドイツ VHS 日本語講師の会（VJV）」）の会員で、上記の質問にオンライン（選択式設問・記述式設問）での回答を依頼した結果、60件の有効回答が得られた。選択式回答は単純集計、記述式回答は KHCoder を用いたテキストマイニングの手法で処理し、共起ネットワーク分析を行った。また、あわせて回答テキストの読解分析も取り入れるようにした。

### 2.3 アンケート調査の結果と分析

以下、特に注目に値する質問項目のみを取り上げ、それぞれの教師会でどのような傾向がみられるかを分析していく。紙面の都合上「ドイツ語圏日本語教育研究会」は「JaH」、「ドイツ VHS 日本語講師の会」は「VJV」と記す。

#### 2.3.1 Part 1 回答者の属性

Part1 では回答者の属性に関して回答してもらったが、本稿では回答者の特徴として「Q3・4 教師歴・会員歴」を概観する。

##### (1) 日本語教師歴

図6から明らかなように、今回のアンケートに参加した人の日本語教師歴は以下のような傾向があった（図6円グラフ内の赤枠）。

JaH：日本語教師歴20年以上の人が52.3%

VJV：日本語教師歴5年～15年の人が52.5%

JaHからはベテラン層からの回答が、VJVは中堅前後期層の教師からの回答がそれぞれ半数以上を占めていた。

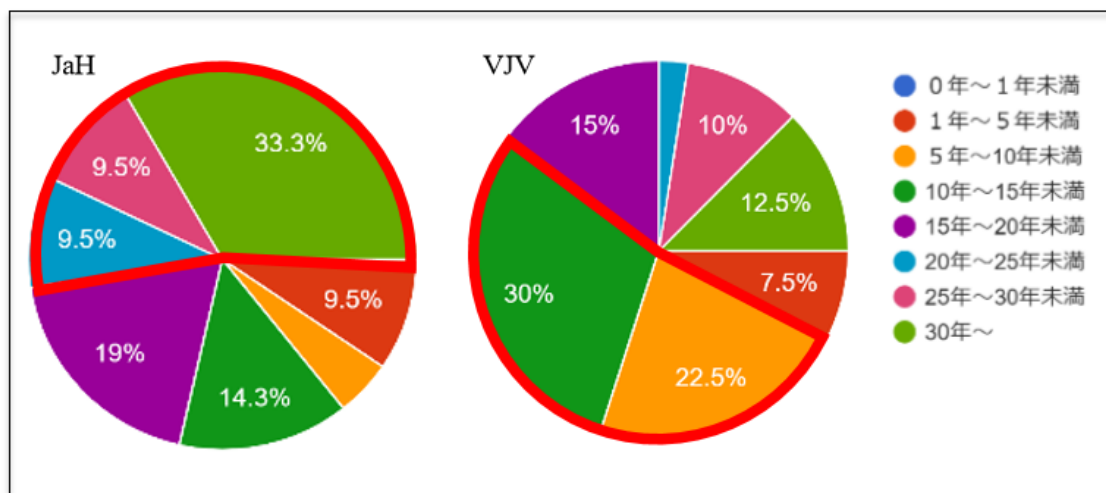


図6 Q3 日本語教師歴

## (2) 所属している教師会

「Q4-2 ドイツ語圏大学日本語教育研究会以外に所属している教師会はありますか」(複数回答可)という質問に対する回答からは以下のような傾向がうかがわれる。

**JaH**: ドイツ国内の他の教師会、ヨーロッパの教師会にも所属している人が多い

**VJV**: **VJV**のみ所属の人が多い

**VJV**の会員は同教師会における活動のみに参加している人が多いのに対し、**JaH**の会員は他の教師会にも所属している人が比較的多いことから、**JaH**の会員は個人的に教師会の枠を超えて活動をしている、つまり「越境」してネットワークングを試みたり学びのチャンスを得ようとしたりしているのではないかと推測される。

### 2.3.2 Part 2 日本語教師観

次に、それぞれの会員の教師観に関する回答を概観する。「Q10 日本語教師動機・やりがい」「Q12 職場・日本語教育の問題点日本語教師歴 研鑽活動・理想の教師」で得られた回答を分析する。

#### (1) 日本語教師の仕事に対するやりがい

「Q10 日本語教師の仕事に対するやりがい」について特徴的なキーワード間の関連性を分析すると、以下のような「日本語教師としてやりがいを感じていること」が浮かび上がってきた。

**JaH**: 学習者の成長に関われること、人生が豊かになること、日独関係に寄与できること、学生からのフィードバック(声)が得られること

**VJV**: 自分も人間的に成長できること、受講者が喜んでくれること

どちらの会員も、授業をすることで学習者の成長に関わることができ、それによって自分自身の人生も豊かになることにやりがいを感じている様子が見受けられる。

#### (2) 職場・日本語教育の問題点

「Q12 職場・日本語教育の問題点」の質問項目からは、それぞれの現場で課題だと感じていることがわかった。

**JaH**: ドイツ語を母語とする教員との連携、初級から中級へ向けてのレベルアップ、コースの到達目標と実践と評価など、カリキュラムに関する反省

**VJV**: ドイツ語で(文法などを)説明すること、新しい指導法(デジタル化や教授法)の必要性

実践において課題だと感じている内容に関しては、**JaH**と**VJV**で若干方向性が異なっているようである。前者の会員は中級レベル以上にどう繋げていくかというコース運営やカリキュラムの見直しが必要だと感じている人が多く、後者の会員は学習者の母語(ドイツ語)での説明力や教授法が不足しているという声が目立っていた。

#### (3) 研鑽活動・理想の教師

「Q14 研鑽活動・理想の教師」の質問項目からは会員が持つ「理想の日本語教師像」をうかがうことができる。

Q14の回答の共起ネットワークを示した図7、図8から、それぞれの教師会の会員が持つ日本語教師像として以下の傾向があることが読み取れる。

**JaH**：専門的な知識・適切性があること、学習目的・教育目的に合ったカリキュラムや授業が作れること

**VJV**：学習者の興味・信頼を得ること、常に努力すること、楽しい授業ができること（学習者が楽しく喜んで学べる環境づくりができること）

理想の日本語教師像に関しても **JaH** と **VJV** の会員は異なる傾向が見られた。前者の会員が持っている「理想の教師像」は **Q12** で確認された「問題と感ずる点」との関連性があることがわかる。それに対し、**VJV** の会員は学習者と教師の信頼関係や学習者が楽しいと感じることに意義を見出していることが浮き彫りになった。

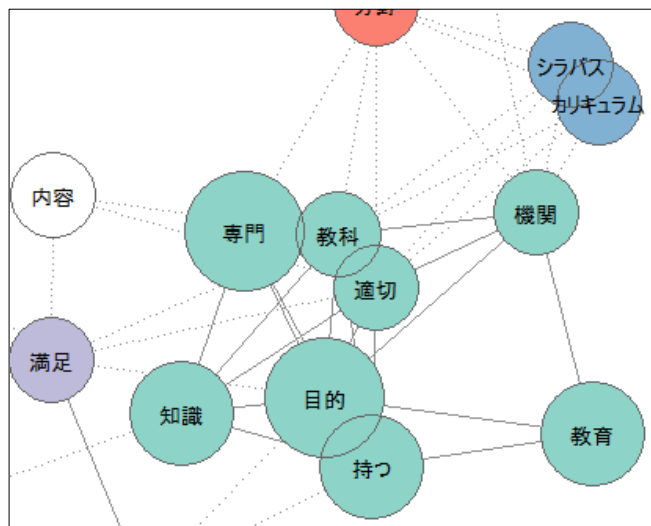


図7 Q14 理想の日本語教師像 (JaH)

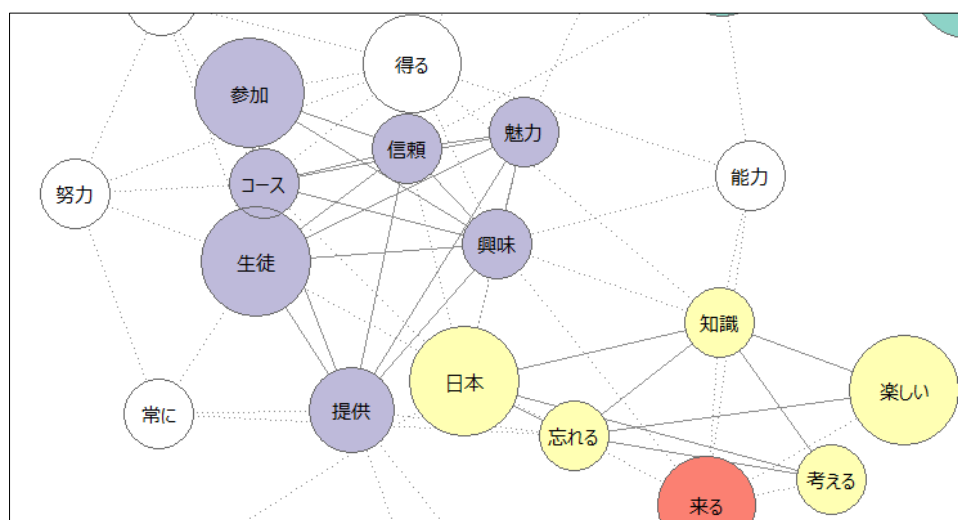


図8 Q14 理想の日本語教師像 (VJV)

### 2.3.3 Part 3 日本語教師会に対する考え

さらに、それぞれの会員の教師会に対する考えを概観する。アンケートの「**Q15・16 教師会入会動機・教師会の意義**」と「**Q17・18 教師会への期待・教師会を通じた自分の変化**」が該当項目である。

(1) 教師会への入会動機

「Q15 教師会入会動機」についてだが、JaH では「ネットワーキング」「新しい授業実践を学ぶ」「教育、事情を知る」というキーワードが目立っていた。一方、VJV も「勉強」「様々な知識を学ぶ」「情報収集」「機会を得る」という言葉が多く見られ、どちらの会員も教師会に入ることによって「学びの場」「情報を得る場」を得ることを期待していることがうかがえる。

この Q15 の回答は「Q17 教師会への期待」との関連性が強く、JaH の会員には「シンポジウムや研修会を開くこと」「情報交換の場・技術の向上ができる場の提供」「ネットワーキング」というニーズがあることがわかった。VJV のニーズに関して類似しており、「学ぶ場の提供」「ワークショップ・講座・勉強会の開催」といった声が多かった。

(2) 教師会の意義

「Q16 教師会とは何か？」という質問に対する回答の共起ネットワークを示したものが図9、図10である。

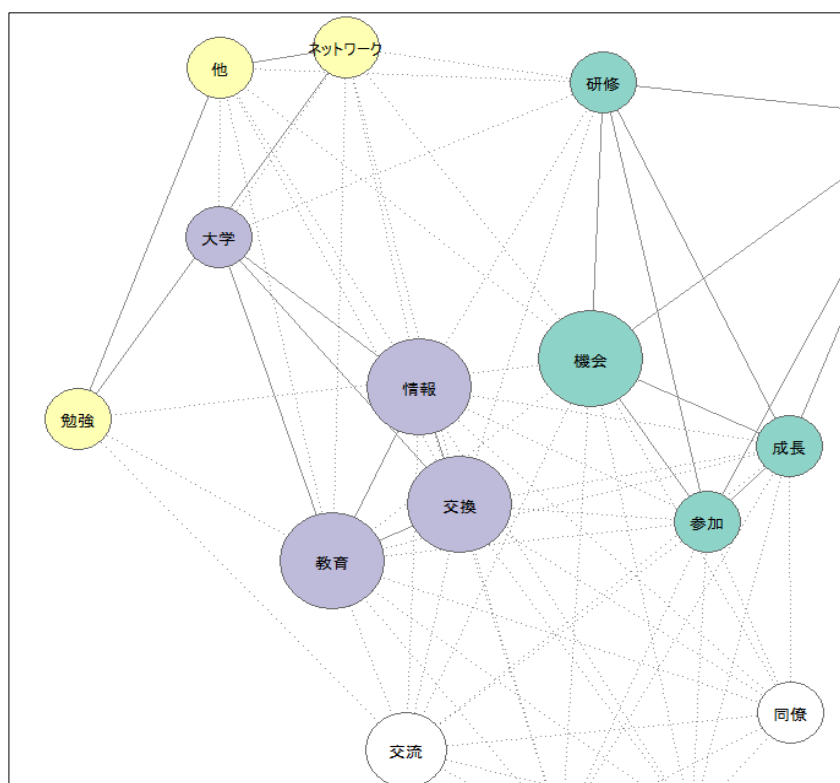
図9、図10の共起ネットワークから、それぞれの教師会会員が考える「教師会の意義」について以下のように分析できる。

JaH：情報交換、研修会などに参加し交流・勉強・成長できる機会、ネットワーキング

VJV：勉強、仲間、情報収集・共有の場所

どちらの会員も教師会のことを「勉強することで成長できる場所」「情報交換・交流できる場所」「ネットワーキング」という概念と結びつけていることが浮かび上がってきた。また、この Q16 の回答は、先述した「Q15 教師会入会動機」と「Q17 教師会への期待」の回答から得られたキーワードと類似しており、関連性が強いことがうかがえる。

図9 Q16 教師会とは何か？ (JaH)



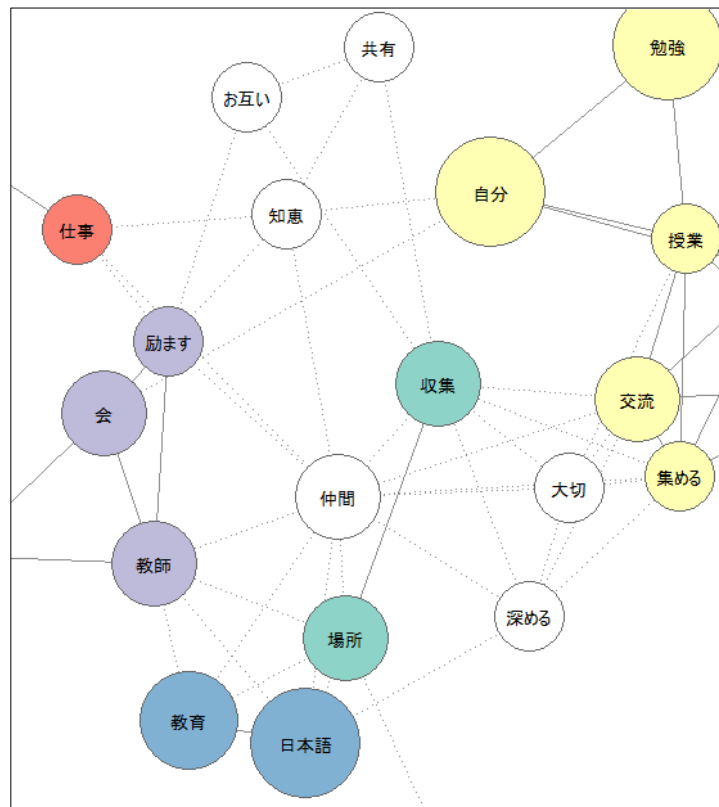


図 10 Q16 教師会とは何か？

(3) 教師会を通じた自分の変化

「Q18 教師会参加 前後の変化」の項目から、教師会の会員が教師会活動に参加することで自分自身にどのような変化があったと感じているかを見てみたい。まず、それぞれの会員に「教師会に参加した後で自分に変化があったと思うか」を4段階評価（1=変化があったと思わない～4=変化があったと強く思う）で回答してもらった。

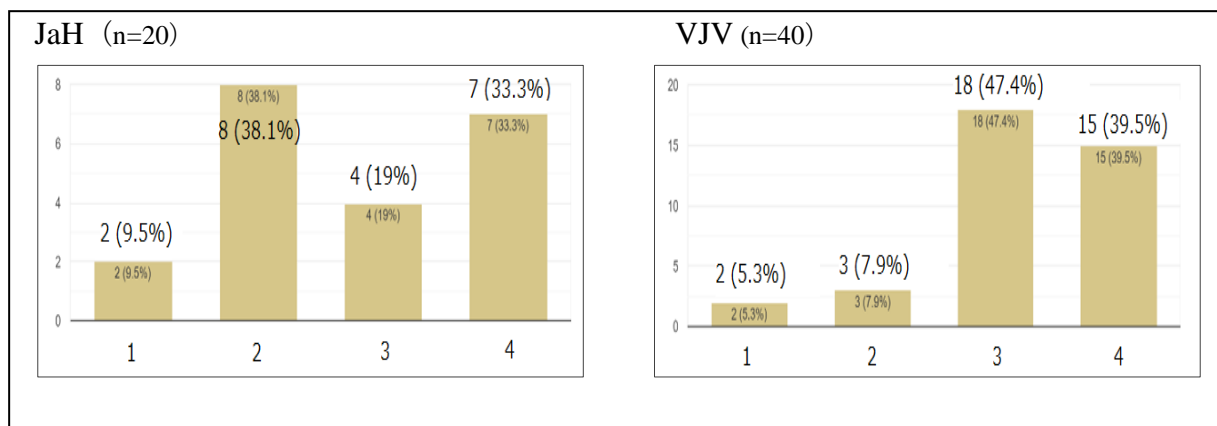


図 11 Q18 教師会参加 前後の変化

図 11 にあるように、JaH の会員は 52.3%が、VJV の会員は 86.9%がそれぞれ「変化があった」と感じているようである。どちらの会員も回答者の半数以上が教師会の活動に参加したことで自分自身に何等かの変化があったと認識していることがわかるが、JaH の会員に関しては、38.1%が 2（あまり変化があったと思わない）と回答していることも特徴的な結果として挙げられ、今後検証する必要があるように思われる。

では、「変化があった」と感じている会員は具体的にどのような変化を認識しているのでしょうか。Q18の記述式に回答を分析してみた結果、以下の概念が見えてきた。

**JaH**：客観的に見ること・相対化ができるようになった、視野が広がった、実践のアイデア・刺激を得た、自信を得た

**VJV**：ネットワークができた、仲間が増えた、情報が得られた、困ったことが相談できた、アイデアや刺激を得た、自信を得た

どちらの会員も教師会活動に参加することで「自信」「ネットワーク」「アイデアや刺激」が得られたと感じていることが推察できる。

### 2.3.4 Part 4 ドイツの日本語教育に対する考え

最後に両教師会の会員がドイツにおける日本語教育の実践に対してどのような困難を感じているかを概観する。会員が普段の実践で「困難を感じていること」を知ることは、教師会の活動や果たすべき役割を考えることに繋がるのではないかと考える。

まず、「Q20 ドイツで教えることの困難さ」の質問項目から、**VJV**の会員は78.9%の人が何等かの難しさを感じており、**JaH**の会員で「困難を感じている」と回答した数を28.9%も上回っていることがわかった。困難があると回答した人に具体的な内容を記述してもらった結果、以下の特徴的な概念が認められた。

**JaH**：リソースに限りがあること、現代の情報の「速さ」に教師がついていくこと、教室外で日本語を使用する機会が少ないこと

**VJV**：習慣や生活（の違い）を理解すること（教師のドイツに対する理解+学習者の日本に対する理解）、教室外で日本語を使用する機会が少ないこと、自分のドイツ語能力の不足

実践において困難を感じていることに関しては、**JaH**と**VJV**とで異なっていることが認められた。学習者が教室外で日本語を使用する機会が少ない点にはどちらの会員も難しさを感じているようだが、**VJV**の会員は**JaH**の会員と比べてより個別的な視点から問題点を捉えており、教師と学習者の関係性や相互理解に重要性を見出していることがうかがわれる。

## 2.4 まとめにかえて—アンケート調査から見えてくるもの—

以上、それぞれの教師会の特徴を概観してきたが、最後にこれらの特徴を比較したうえで2つの教師会の可能性を探りたい。

まず、**JaH**と**VJV**に共通している関心は、「教師会に求めること」であった。具体的には以下の概念が浮かび上がってきている。

- ・情報交換、情報収集、成長・技術が向上できる場の提供
- ・ネットワーキング
- ・テーマが設定された研修会、勉強会、ワークショップ

どちらの教師会会員も、研修会やワークショップのように、ネットワーキングや情報交換、そしてスキルアップができる場を提供してほしいと考えている様子を見て取れることができる。

一方、**JaH**と**VJV**で異なっている関心は、「教師像」「問題意識」そして「困難だと感じていること」であった。以下にそれぞれの教師会の会員から出てきた概念を再掲する。

表2 JaH と VJV の会員による回答から見られる異なる関心事

	JaH	VJV
教師像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 専門的な知識、適切性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習者の興味、信頼を得る</li> <li>・ 常に努力</li> <li>・ 楽しい授業</li> </ul>
問題意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育目的に合ったカリキュラム作成、授業づくり、評価</li> <li>・ ドイツ語を母語とする教員との連携</li> <li>・ 初級から中級へ向けてのレベルアップ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ドイツ語による文法説明</li> <li>・ 新しい指導法の必要性</li> </ul>
感じていること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現代の情報の速さについていくこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ドイツ語能力の不足</li> <li>・ 習慣、生活の違いの理解（教師のドイツに対する理解+学習者の日本に対する理解）</li> </ul>

JaH の会員は、コースやカリキュラムづくり、そして授業を支える枠組みをどうやって作ることができるかというポイントに関心が集まっているようである。一方、VJV の会員はもう少し具体的なところに関心があり、楽しい授業づくり、教える技術のスキルアップ、学習者との信頼関係の構築といったより実践的で個別性の高い問題に焦点が当たっているように思う。

このように、それぞれの教師会の会員が持つ関心事は少し異なっているが、相互補完的な関係にあるとも言えよう。どちらの教師会も「ネットワーキング、情報交換、スキルアップができる場」を求めているのであれば、教授対象者別の教師会の多様性のある特徴を活かしてJaHとVJVの合同の学びあいの場を設けることはできないだろうか。鈴木他（2017）では、教師会の特徴として「日本語教育の発展にむけ、教育現場の様々な人間が集い学ぶ、多様性のある開かれた場」であることを挙げている。JaHとVJVの2つの教師会が協働することで異なる教育現場の多様な人達が集うことになり、刺激を与え合い、学び合うことでより視野が広がることが期待できるのではないだろうか。そして、それは結局ドイツ国内の日本語教育の発展へと繋がり、学習者によりよい学習環境を提供することができるようになるのである。

本稿では、ドイツにおける教授対象者別の2つの教師会へのオンラインアンケート調査の結果をもとに、それぞれの教師会会員が教師会に何を求めているのか、どのような教師観を持っているのか、共通点および相違点は何かを概観した。その結果、JaHとVJVの教師会の横の繋がりを作っていく可能性があることが見えてきた。筆者は両教師会の一会員に過ぎないが、いつか2つの教師会の協働が実現されればドイツ国内の教師会活動の新たなあり方が浮かび上がってくるのではないかと考えている。

《執筆：三輪》

## 第三章 【パネル 2】

### オンライン日本語教師研修会に関するニーズの分析—アンケート調査から

第一章で述べた通り、『日本語教師会 in 欧州』プロジェクトの目的として、①ヨーロッパ内での日本語教師会の横のつながりを作ること、②ヨーロッパにおける日本語教師会が目指す方向性と可能性を模索することの2つの柱がある。本章では、②の最初の段階として、実際にオンライン教師研修会（以下、オンライン研修会）について行ったアンケート調査とその分析について報告する。

#### 1. 調査概要

##### 1.1 調査目的

鈴木他（2017）ではヨーロッパ各地に住む日本語教師への研修参加の機会の提供や共通のテーマに関心を持つ教師たちの繋がりや構築の観点から、オンライン研修会の必要性や有効性が示唆されたが、具体的にはどのようなニーズがあるのだろうか。そこで現状を把握するために、実際にヨーロッパ地域全体ではオンライン教師研修が必要とされているのか、またニーズがある場合どのような研修が求められているのかについて、ヨーロッパで日本語教育に携わる教師を対象にアンケート調査を実施した。

##### 1.2 調査期間と調査対象

2018年12月から2020年2月にアンケート調査を実施したが、回答数は165件であった。なお、今回の調査はヨーロッパ在住の日本語教師を対象としたものであったため、うち159件を扱うこととした。なお、調査時点で日本語教師会に入会しているかどうかは問わなかった。

##### 1.3 調査方法

オンライン上でアンケートを配布・回収する形で実施した。ヨーロッパ各国にある日本語教師会の会員や会長を通じて協力を依頼し、メーリングリスト等を通じて会員向けにアンケートの情報を流した。また転送自由とした。

##### 1.4 質問数と質問内容

質問数は20問で、回答選択の理由や「その他」を選んだ場合の具体的な内容を記述する箇所以外は、選択式の質問で構成されている。また質問内容は大きく4つのカテゴリー「1. オンライン日本語教師研修会全体」「2. 研修内容」「3. 日本語教師会との関わり」「4. 回答者の属性」に分類される（表3）。

#### 2. 分析結果と考察

以下、調査で得られた159名のデータについて、「回答者」「オンライン研修への関心」「研修形態やテーマに関する関心」の3つの観点でまとめる。

## 2.1. 回答者

表 3 アンケートの質問項目リスト

1	オンライン研修会に関して	Q1.受講経験 Q2.オンライン研修会に関する関心の有無 Q3.研修形態に関する希望 Q4.参加人数の規模に関する希望
2	オンライン研修会の内容	Q5.興味がある研修内容 (*以下 Q5 の各テーマの中で関心の詳細) Q6.授業実践・活動 Q7.日本語学・言語学 Q8.言語教育学 Q9. CEFR
3	日本語教師会への関わり	Q10.居住国等の日本語教師会入会の有無 Q11.入会していない理由 (Q10 で入会していない場合) Q12.教師会への関わり方 (Q10 で入会している場合) Q13.研修会等への参加頻度 (Q10 で入会している場合)
4	回答者の属性や特性	Q14.居住国 Q15.日本語教師歴 Q16.所属機関 Q17.教授対象者 Q18.母語 Q19.オンラインでの対面会話実施状況 Q20.オンライン・イベント参加度

### 2.1.1 居住国、母語

居住国に関しては、任意回答であったため、17カ国 125名から回答が得られた (図 12)。

なお、日本語を母語とする教師は 92.1 パーセントと全体の大多数を占めていた。

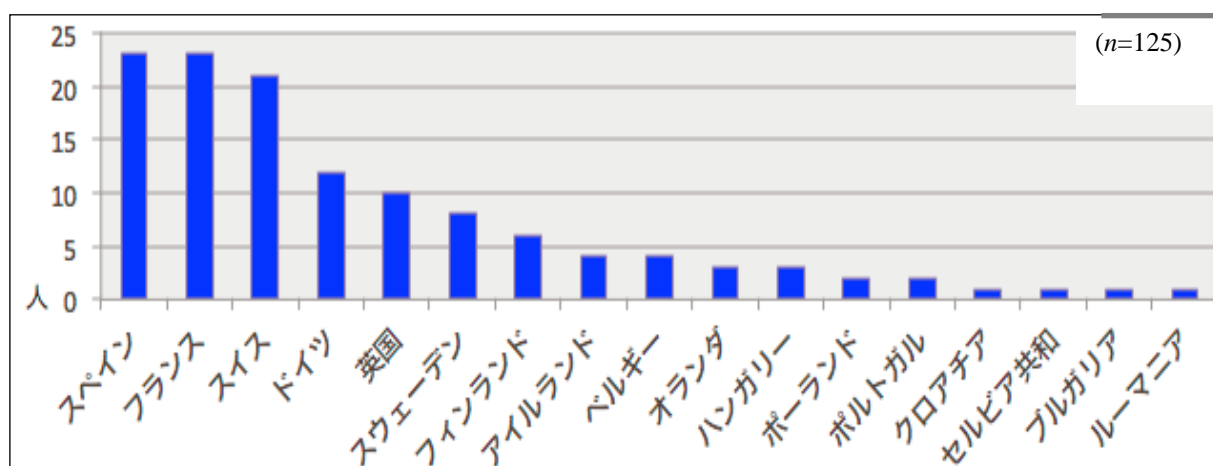


図 12 回答者の居住国 国別数字

### 2.1.2 所属機関、日本語教師歴

所属機関 (複数回答) については、高等教育機関が最も多く、ついで学校教育外、個人授業の順であった (図 13)。初等・中等教育機関や補習授業校など年少者や若年

層を対象とした機関で教えている教師は少数だった。また、複数機関で教えている教師は全体の約半数の48.7%であった。

教育経験年数については、「10-19年」という回答者が全体の44.0%を占め最も多かったが、「3-5年」「6-9年」の比較的経験年数の少ない人から「20-29年」「30年以上」のいわゆるベテラン教師まで幅広い層からの回答が得られた。(図14)

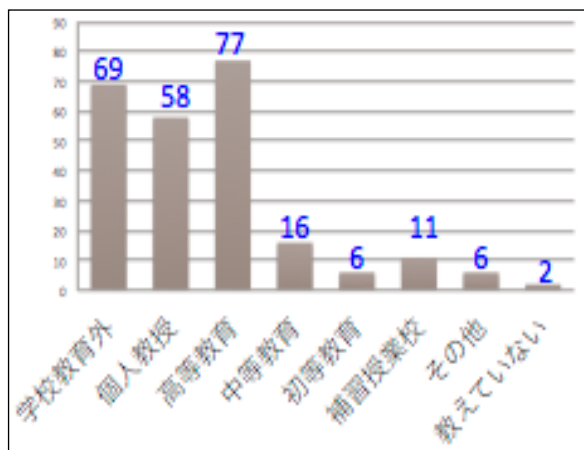


図13 所属機関別（複数回答）  
\*数字は回答者数

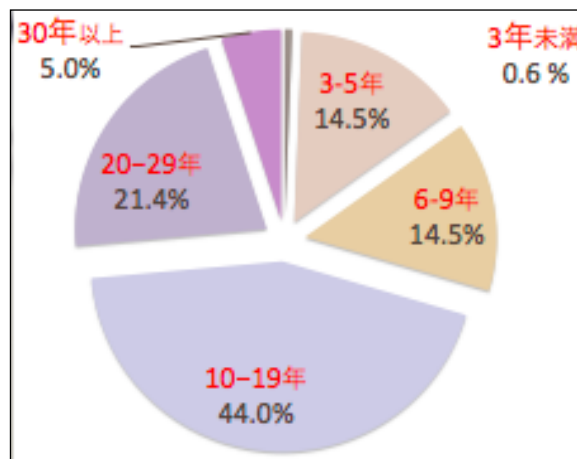


図14 日本語教育経験年数数別 (n=157)

### 2.1.3 教師会への参加

教師会入会の有無について、有効回答数157の92.4%が「教師会に所属している」と回答している。また、教師会に入会している145名が具体的にどのような形で教師会の活動に参加しているかについては、セミナーや勉強会に参加(100%)、メーリングリスト等で情報収集(85.7%)という回答が多くみられた。なお、教師会に入会していない人(12名、全体の7.6%)の理由としては、「時間がない」「開催地までのアクセスが不便な地域に住んでいる」「ほとんど利用できない」「現在の収入では参加できない」などを挙げており、教師会の活動に参加するためにかかる時間や費用の問題が推察される。

以上をまとめると、本調査のデータは、ヨーロッパの多数の国で日本語教育に携わる日本語母語話者中心であり、日本語教師歴、所属機関が多様という特性を持っている。また回答者のイメージとしては、教師会に所属し、セミナーや勉強会等の活動にも参加している層と言える。

## 2.2 オンライン研修会への関心

オンライン研修会に対するニーズを問う質問については、「とても関心がある」「関心がある」という回答を合わせると91.4%(146名)あり、オンライン研修の関心の高さが現れている。一方、実際のオンライン研修会の経験については、参加経験が10回以上ある人は13.2%で、「参加経験がない」「参加経験が1-4回」という回答が約8割であった(図15)。そこで、オンライン研修会だけでなく、オンラインイベントに参加するかどうかについて尋ねたところ、「よく参加する」「ときどき参加する」という回答は3割にとどまった(図16)。

これらのことから、オンライン研修会への関心は高いものの(91.4%)、参加経験は

少ない教師が大多数を占めており、オンライン上で行われるイベント自体への参加も少ない状

況がうかがえる。加えて、2.1.3 で見たように、会場に集まって行われる従来どおりの「対面式研修」には積極的に参加していること、オンライン研修会への関心自体は高いことから、ニーズにあった研修会の機会が提供され、「きっかけ」があれば、教師の学びの手段としてオンライン活用の可能性が高まっていくと言えるのではないだろうか。

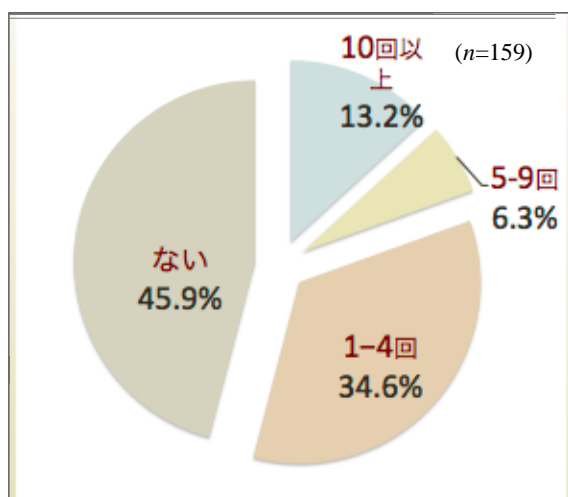


図 15 オンライン研修会参加経験

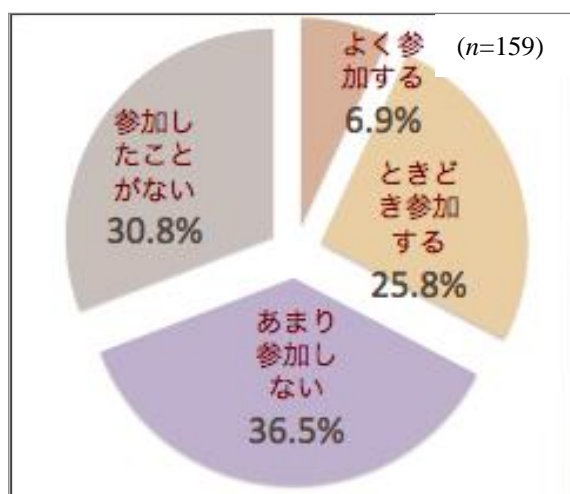


図 16 オンラインイベントの参加度

なお、前述の 2.1.3、図 14 の「教師会に入会していない回答者」12名のうち 10 名が「とても関心がある」「関心がある」と回答しており、時間や費用の負担の少ないオンラインで研修を実施することで、教師会に入会していない日本語教師にとって、研修に参加する機会が増え、他の教師とのネットワークが広がることが期待される。

### 2.3. 研修の形態やテーマに関するニーズ

本節では、2.2 でオンライン研修会の関心の高さが明らかになったが、具体的にどのようなオンライン研修会が望まれているのだろうか。オンライン研修会の「形態」「規模」「テーマ」の 3 点に注目し、考察する。

#### 2.3.1 形態

「オンライン研修会に関心がある」と回答した 146 名に対して、参加形態に関して 4 つのタイプ（「A. 講義を聞くだけ」「B. 講義を聞いてチャットにコメントを記入する」「C. 3-4 人の小グループに分かれて話す」「D. オンライン参加者全員が話す」）を提示し、それぞれ参加希望について質問した（図 17）。「とても参加したい」「参加したい」という積極的な反応が最も多かったタイプが「A. 講義

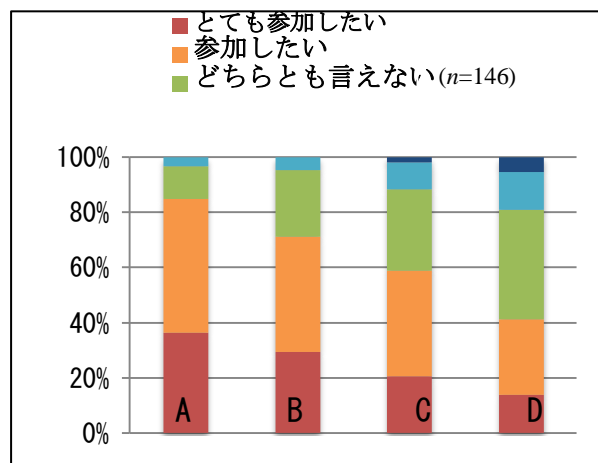


図 17 形態別の参加希望

を聞く」で、「D. オンライン参加者全員が話す」は最も少なく、参加希望の割合は4割程度であった。

2.2 で触れたように、調査対象がオンライン研修会自体にあまり慣れていないことから、参加者が発言など積極的な参加を求められるものよりは、講義を視聴する形態が好まれることがわかる。

### 2.3.2 研修参加者の人数

会場に参加者が集まる対面式の研修会では、会場の広さなど物理的環境の影響で人数が制限されることがあるが、オンラインの場合はそのような制約を受けにくい。では、研修参加者の人数に関しては、どの程度の規模が好まれるのだろうか。オンライン研修会の参加人数について尋ねたところ、「6-15人」「16-30人」を希望する回答が最も多かった（図18）。

では、上記の研修の規模（参加人数）は、講義の場合でも参加者の発言が求められる場合でも同じなのだろうか。オンライン研修の形態による差はあるだろうか。

図19は、それぞれの形態ごとに、「とても参加したい」「参加したい」と回答した研修会の規模についてまとめたものである。小グループで話したり、全員がコメントを述べたりするなど発言が求められるものは、「6~15人」「16~30人」を希望する割合が高く、8割を超えるが、講義型はどの規模でも一定の要望がある。つまり、オンライン研修会の参加人数の設定を考える場合、講義型の場合は参加人数に関してそれほど注意をはらわなくてもいいが、特に参加者が発言する機会がある研修会は参加者が参加しやすい研修規模に配慮する必要があると言える。

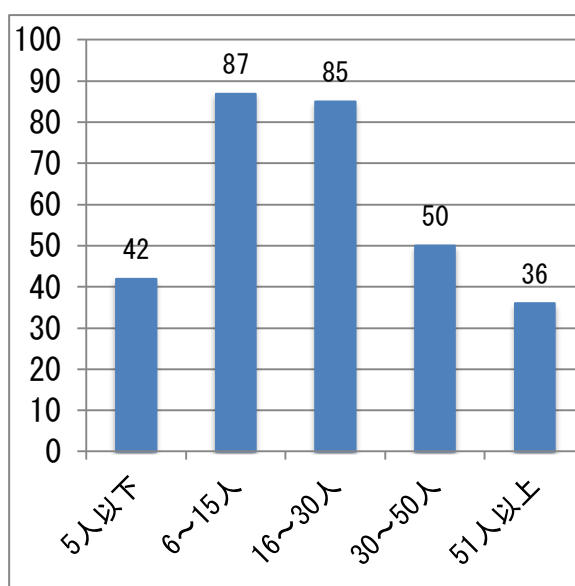


図18 研修参加者の人数の希望(複数回答)

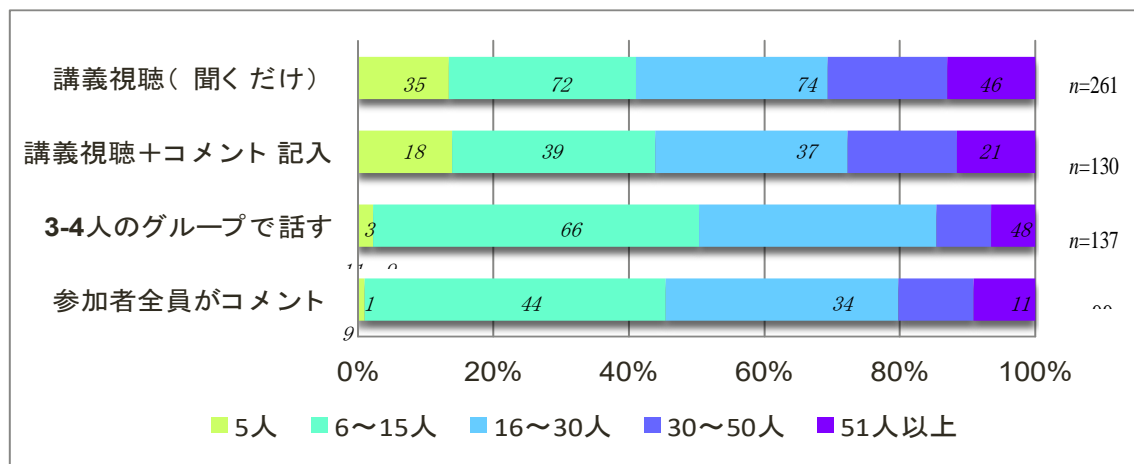


図19 オンライン研修会の形態別の希望人数の割合(複数回答)

### 2.3.3 テーマ

研修テーマについてはどのような希望があるのだろうか。鈴木他（2017）の研修テーマの分類のカテゴリーを用いて、オンライン研修会でのテーマの希望を聞いたところ、有効回答 158 件のうち「授業実践・活動」という回答が最も多かった（図 20）。続いて、「コースデザイン」「実践報告や現場での課題などの情報共有」のように教育実践に関係が深いものと「日本学・言語学」「言語教育学」など理論的なものへの関心が高い。

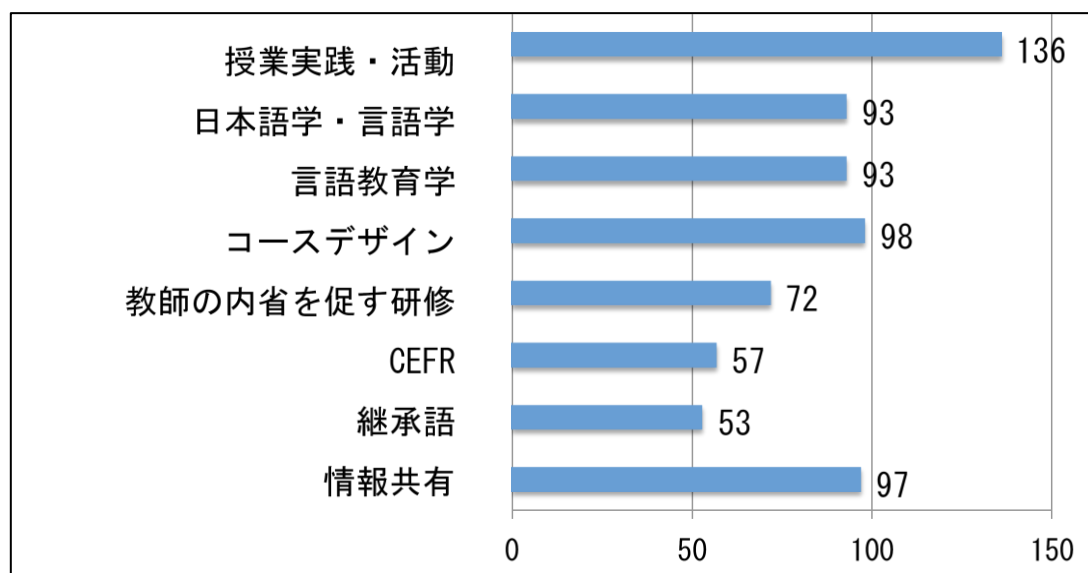


図 20 オンライン研修会の希望のテーマ(複数回答)

それでは、これからのテーマへの関心は日本語教育経験年数によって違いがあるのだろうか。テーマと日本語教育経験年数の関係を分析したものが図 21 である。例えば、「日本語学・日本語教育学」について日本語教育経験年数 3-5 年の 23 名のうち「関心がある」と答えている人は 40 %程度にとどまっているが、20-29 年の人は 8 割近く

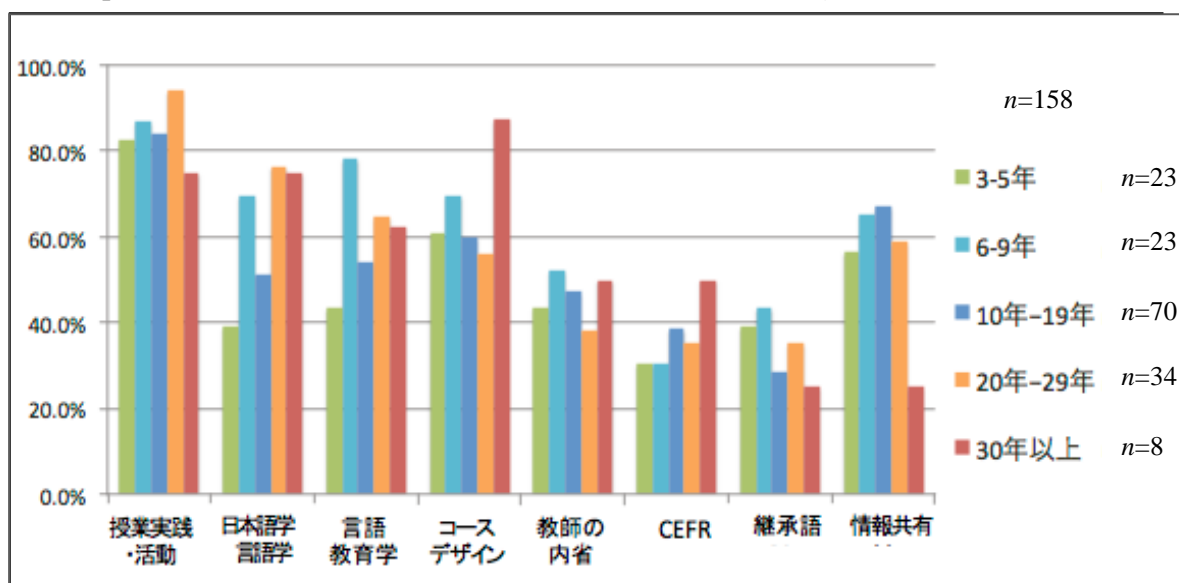


図 21 テーマごとに見た希望している参加者（日本語教育経験別）の割合（複数回答）

に上る。

図 21 から「授業実践・活動」や「教師の内省」については、教育年数によって差があまり見られないが、一方「日本語学・言語学」「言語教育学」については教育年数によって違いが大きいことがわかる。また、教育年数が 30 年以上の教師の場合、コースデザインを希望する割合が高く、情報共有については関心が低いなど、他の経験年数と異なる傾向が見られた。このように関心のある研修テーマについて経験年数による違いは、今後オンライン研修会を企画する際に、テーマや参加対象を設定する上で参考できる情報である。

### 3. まとめ

本調査から、オンライン研修会への参加経験は多くない教師が大部分を占めるものの、オンライン研修に関する関心が高いことが確認された。また、オンライン研修に関する形態や規模、テーマについての関心やニーズ等の全体的な傾向が明らかになった。

オンライン研修会に関心を持っている人が多いが、現時点では参加経験の少ない人が多数であることから、特に参加経験が少ない人たちを意識したアプローチが重要である。例えば講義を聞くことが中心の「講義型」と参加者の発言が期待される「ディスカッション型」とでは、前者のほうが概して参加希望の割合が高く（2.3.1 図 17）、参加人数にも大きく左右されないこと（2.3.2 図 19）から、講義型のオンライン教師研修からまずはじめてみることもできるであろう。

しかしながら、テーマの希望を見ると「授業実践・活動」や「情報共有」に関心が高いことから（2.3.2 図 20）、参加者同士による話し合いの場の提供は重要である。このようなディスカッション型の実施については、3-4 人のグループで話したり参加者全員が発言したりする形態を希望する半数が、研修規模として「6-15 人の参加者」を望んでいることから（2.3.2 図 19）、参加人数に配慮しながらディスカッション型の研修をデザインしていきたい。

なお、本調査では上記のような全体的な傾向は掴めたものの、オンライン研修会に関して参加者がどのように感じているのか、運営の際にどのような配慮が必要かなどについての詳しいニーズについては把握できていない。今後オンライン研修会を企画・実施するにあたって、教師たちが参加しやすい研修を提供するためには、具体的にどのような進め方が好まれるのか、運営上どのような点に配慮すべきかについて留意することは重要であろう。

時間や経費をあまりかけずに、距離を越え、気軽に参加できるオンラインのメリットを生かし、教師にとっての新しい学びの機会の可能性を今後検討していく上でも、参加する教師たちの声を聞きながら、よりよいオンライン研修会の実施を考えていく必要があることが改めて認識された。

《執筆：近藤》

## 第四章 【パネル 3】

### オンライン研修会に向けて—オンライン研修会のための試験的实施と考察—

#### 1. なぜパイロット研修会を行うのか

第三章で考察したオンライン研修会に関する調査では、オンライン研修会に対して非常に関心があることが確認され、オンライン研修会の多様なニーズに関しても全体像を掴むことができた。この結果を踏まえて、今後「日本語教師会 in 欧州」プロジェクトメンバーでより良いオンライン研修会をデザインするにあたり、さらに詳しく参加者の意見を聞く必要があると考えた。そこで、まず試験的な研修会（以後、パイロット研修会）を実施し、参加者にオンラインによる研修会を体験してもらい、さらに研修会の事後アンケートを行うことでより具体的なニーズを調査することにした。本章では、パイロット研修会のデザインと、実施方法、また、研修後に行ったアンケート調査の結果について報告する。

#### 2. パイロット研修会のデザインと実施方法

パイロット研修会をデザインするために、まずオンライン研修会のニーズ調査（第三章参照のこと）の結果をもとに、研修会の形態、テーマ、参加者の属性について話し合った。

なお、今回のパイロット研修会では、オンライン会議システム「Zoom」<sup>6</sup>を使用するが、ニーズ調査の結果から Zoom を利用したことがない人も多いことが判明したため、参加者に慣れてもらうためのオリエンテーションも行うことにした。

##### 2.1 形態

今回のパイロット研修会では、調査結果でより多くの人々が望んでいた講義型と参加者同士があるテーマについて話し合うディスカッション型を選んだ。ディスカッション型のグループ人数については、第三章の調査では 3、4 人のグループ設定についてしか調査をしなかったが、実際の研修会などでは 5 人程度でグループワークを行うこともあることから、① 5 人、② 3 人 とした。また、一般的なオンライン研修会のグループディスカッションにおける進行役の有無を参考にして、5 人のグループには話し合いの進行役を 1 名決めてもらい、3 人のグループでは進行役を決めず自由に話し合うこととした。また、それぞれのグループディスカッションの後に、各グループで話し合ったことを参加者全員で共有し、意見交換する時間を準備することとした。

##### 2.2 テーマ

講義型と 2 つのディスカッション型それぞれのテーマについては、第 3 章のアンケート結果をもとに、それぞれのセッションにおいて、どのようなテーマが参加者にとって話しやすいかを考えた。最終的に講義型はヨーロッパ各国で共通の課題を、5 人のグループディスカッションでは教師の内省を促すテーマを、そして 3 人のグループディスカッションでは授業実践と授業活動に関するテーマを設定することとした。

## 2.3 参加者

実際オンライン研修会では、参加者の属性も様々で、オンラインでの研修やディスカッションに慣れている人もそうでない人も共に参加するという状況がより現実的であるだろうと考え、今回のパイロットオンライン研修会でも、オンライン研修会への参加経験の有無を区別せず参加者募集の広報を行った。

## 2.4. オリエンテーションの企画

オンライン研修会への参加経験が少ない人やオンライン会議システム「Zoom」の利用に慣れていない参加者に向けて、PDF版でZoomの使い方の説明書類を作成し、研修会当日の2週間ほど前にメールで配布することにした。また、参加者からの個別の質問にもメールで対応できるようにした。研修会当日は、開始直前の30分を利用して、希望者にZoomの会議室に入ってもらい、具体的な使い方の確認をすることとした。

## 2.5 実施方法

研修会の広報は、オンライン研修会のニーズ調査を依頼した21カ国の教師会にメールで行なった。その際、募集要項として、定員を15名とし、オンライン研修会の参加経験を問わず、パイロット研修会の趣旨に賛同し参加を希望する教師を募った。その結果、20名からの応募があった。応募者の居住地はアイルランド、オランダ、クロアチア、スウェーデン、スペイン、ドイツ、ハンガリー、フランスで、教師会がない国からも参加があった。

また、東欧からの参加希望も多く見られる。

図22は具体的なパイロット研修会のプログラムである。

日時：5月4日（土）10時（中央ヨーロッパ時間 CET） 場所：Zoom オンライン会議室 -Zoom 初心者に向けたオリエンテーション（30分） -はじめに（当日の流れの説明、参加者同士の自己紹介など）（10分） -講義型体験 テーマ「学習者のモビリティから考える教師の役割」（20分） -質疑応答（10分） -ディスカッション型体験（1）5人グループ、進行役1名（15分） テーマ「10年後の日本語教師に求められるもの」 全体共有（10分） ディスカッション型体験（2）3人グループ、進行役なし（15分） テーマ「授業での翻訳活動」 全体共有（10分） -終わりに（研修後アンケートの依頼）（10分）
---

図22 パイロット研修会プログラム

公募の時点では、オンライン研修会という研修会の形態に焦点を当てるため、ディスカッションのテーマやディスカッションのグループ人数などの詳細は明記しなかった。つまり、応募者が実際の研修会のように学ぶ内容やテーマによって参加を希望し

たのではなく、今後のオンライン研修会実施のプロジェクト自体への関心が参加動機であったと解釈できるのではないだろうか。このことから、ヨーロッパで日本語を教えている教師のオンライン研修会実施に対する期待がうかがえる。

《執筆：高橋》

### 3. 研修後アンケート

第3節では、前節で企画したパイロット研修会の事後アンケートに関し、報告する。

#### 3.1 目的

このアンケートの目的は、オンライン研修会に関する量的な調査を実施、分析した第3章（パネル2）の結果に、質的な調査、つまり、パイロット研修会に対する参加者の印象、意見を加えることにより、より具体的な研修会実施へ示唆を得ることである。

#### 3.2 アンケートの内容、および調査と分析方法

アンケートは研修会修了後、参加者にオンラインによるアンケート調査の URL を送付し、無記名で回答してもらった。回答形式は、選択式設問と記述式設問の両方があり、選択式設問は単純集計、記述式設問は複数の評価者によるキーワード抽出で行った。質問は、以下のように大きく4つの項目に分かれている（表4）。

表4 パイロット研修会事後アンケートの質問項目リスト <sup>7</sup>

1	オンライン研修会について	Q1 参加経験 Q2 今回の参加動機 Q3 対面式教師研修会への年間平均参加回数
2	パイロット・オンライン研修会への意見	Q4 使用媒体 Q5 Zoom の経験の有無 Q6 技術的トラブルの有無 Q8 Zoom オリエンテーションへの参加と参加者の意見 Q9 活動の時間配分 Q10 講義型セッションに対する意見 Q11 Q12 Q13 3人 / 5人および全体でのディスカッションに対する意見
3	オンライン研修会への意見	Q14 オンラインによる研修会のメリット Q15 オンラインによる研修会のデメリット
4	2019 年度オンライン研修会実施に向けて	Q16 参加希望の有無 Q17・18 希望の時期・曜日・時間帯 Q19 要望 Q20 自由意見

#### 3.3 分析結果

有効回答数は17（参加者19人中）であった。

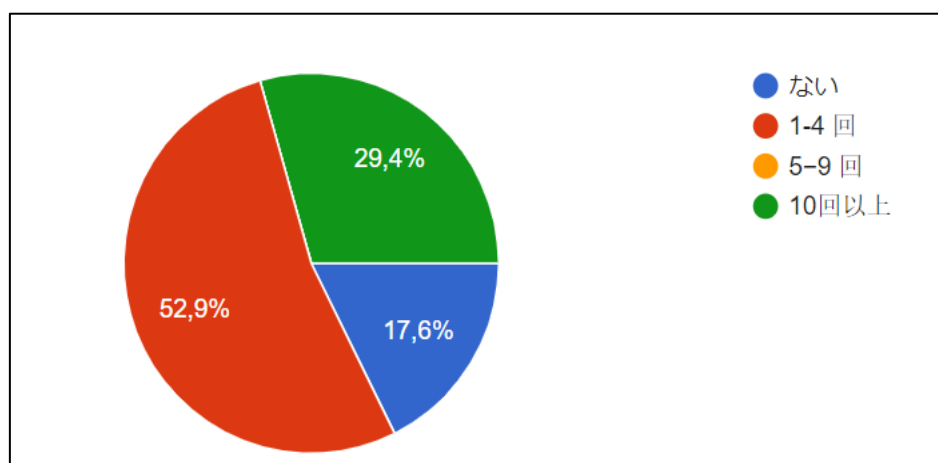


図 23 オンライン研修会の参加経験

分析は、前節に示した 20 問の回答を、「1. 参加者の属性」、「2. 本パイロット研修会参加体験：メリット、デメリット、要望・希望」、「3. 活動形態：講義型」、「4. 技術的問題とオリエンテーションの必要性」、「5. 具体的な実施に向けて」の 5 つの観点から行った。以下、各項目の結果を述べる。

### 3.3.1. 参加者の属性

オンライン研修会への参加経験は、「10 回以上」と回答した人が約 30%、「1 回から 4 回」の人が 53%、「5 回から 9 回」は 0%、「初めて参加」が 20%弱となり、回答者の属性として、経験豊富な層と、経験が低い層に二分された（図 23）。

さらに、この結果を、会場に集まって行われる従来型の研修（以下、対面式研修会）の年間平均参加回数との関係でまとめたものが表 5 である。

表 5 研修会参加経験：オンラインと対面式

		今までのオンライン研修会への参加経験		
		0 回	1~4 回	10 回以上
対面式研修会への 1 年間の平均参加回数	0 回	0 人	1 人	0 人
	1~3 回	1 人	7 人	1 人
	4~6 回	1 人	1 人	2 人
	8~10 回	1 人	0 人	1 人

この結果は、オンライン研修会の経験者が、対面式研修会にも多く参加しているわけではないこと、また、その反対に、オンライン研修会に参加したことがない人が対面式研修会にも参加していないわけではないことを示している。このことは、言い換えれば、オンライン研修会と対面研修会への参加頻度は、教師の自己研鑽への意欲の高さに比例するのではなく、つまり、高い頻度で研修会に参加している教師ほど自己の学びにより熱心だとは言いきれないことを示し、むしろ、教師を取り巻く環境が研修会参加の可否に要因として働いていることを示唆しているのではないかと考えられる。この考察から、二つの形態の研修会は、「補完的な役割」を果たしており、

「どちらが重要」ではなく、「どちらも重要」であると解釈できるのではないだろうか。

### 3.3.2. 本パイロット研修会参加体験

参加者の記述回答からキーワードを抽出し、そこから解釈できたことを以下に示し、同時に、回答記述の中でキーワードに該当するものを一部例示する。

#### 3.3.2.1. オンラインで研修を行うメリット

「オンライン研修会のメリットは何か」という質問に対する自由記述回答からは、実用性の観点および、交流の観点から長所が認識されていることが示された。

##### ① 実用性：時間・経費の節約

- 自宅で参加できる
- 移動する時間がない
- 遠隔地からも参加できる
- 長時間かけて現地まで足を運ばなくていい
- 時間やお金の節約になること
- 移動の手間と交通費がかからない
- 出張費などのサポートがなく参加できる
- 経済的にも助かる

##### ② 実用性：快適さ

- オンライン上の研修会の利点としては、参加者の成果物がテキストデータとして共有しやすい、ということが一点あげられると思います。
- 子供が居ても参加できる
- 参加する際に自分自身をおく環境を自分が好きなようにセッティングしておくことができる（パソコン・スマホ・ノート、お茶など）
- 進行中にもチャットにどんどん書き込んでシェアできる

##### ③ 交流の場としての機能

- 新たな出会いが可能で異文化交流ができる
- 自宅にいながら遠隔地の人と交流できる
- 遠くに住む人たちと話ができる
- 同じヨーロッパで教壇に立つ普段会えない人との交流の場

#### 3.3.2.2. オンライン研修会を行うデメリット

一方、「オンライン研修会のデメリットは何か」という質問に対する自由記述回答には、実際に会っているのではなくバーチャルな出会いであることに起因する要因が、短所として示された。

##### ① 距離感

- 個人的に質問などができない

- 質問がしにくい
- 話しづらい
- 参加者の顔を覚えられない
- 緊張する
- 今後の交流につながりにくい
- 休憩時間などの参加者とわかりあえる機会がない
- 研修直後に簡単に話を続けられない

② 活動などへの物足りなさ

- 長時間の活動でも成果物を出すような活動ができない
- 複雑な内容の理解（対面のほうが集中が続きやすい）がしにくい
- グループ作業はできない
- オンライン形式の方が疲れる
- テーマ外での情報交換ができない

③ 機材への不安

- ネットの回線の問題
- ネット環境や機器の不具合が起こる可能性
- マイクとカメラでひろえない情報（あまりないですが、身振りとか）は伝わらない

3.3.2.3. 希望・要望

希望・要望に関連する回答は、以下に示すように「オンライン研修会に対して」、「ディスカッションに対して」、および、「教師会の活動の観点から」の3点に分類できた。

① オンライン研修会に対して：参加者の自己研鑽への意欲

- オンラインの個人レッスンの仕方を学びたい
- スクリーンや音声のオンライン授業での利用法が知りたい
- 踏み込んだオンライン研修会をしてほしい
- 内容がよく理解できるように事前課題や参考図書の提示が欲しい
- 参加者の人数は最高20名程度がいい
- 雰囲気をはぐすためにグループワークから始めてほしい

② ディスカッションに対して：意見交換への高い動機

- テーマを問わず参加したい
- 小さいグループでのディスカッションは生の対面コミュニケーションと同じくらいの満足感があつた
- 欧州内の先生方と自宅にいながらディスカッションできたことはとても有意義だった
- ヨーロッパ各地で日本語教育に携わっている方の意見を聞くことができ大変有意義な研修だった」

③ 教師会の活動の観点から：教師会の役割への肯定感

- 研修会をオーガナイズする者の立場から学ぶものが多くあった
- 常に自分をアップデートしていくために、教師会の役割は大変重要になってくる 日本語教師の数が少ない国、教師会自体が無い国の先生方には特に有意義な企画だ

3.3.3. 活動形態：講義型と3つのディスカッション型

本パイロット研修会では、次の4つの異なる型のセッションを行った。「A：講義（20分）」、「B：5人のディスカッション（15分）」、「C：3人のディスカッション（15分）」、および「D：全体のディスカッション（10分）」である。その各セッションの型に対する参加者の意見を把握するために、各活動をどれくらい有意義に感じたかを5段階評価（1. とてもそう思う～5. 全くそう思わない）で回答してもらった（図24）。その結果、「C：3人のディスカッション（15分）」を「とてもそう思う」とした回答が最も多かった。以下に、形態ごとに参加者からの回答をまとめる。

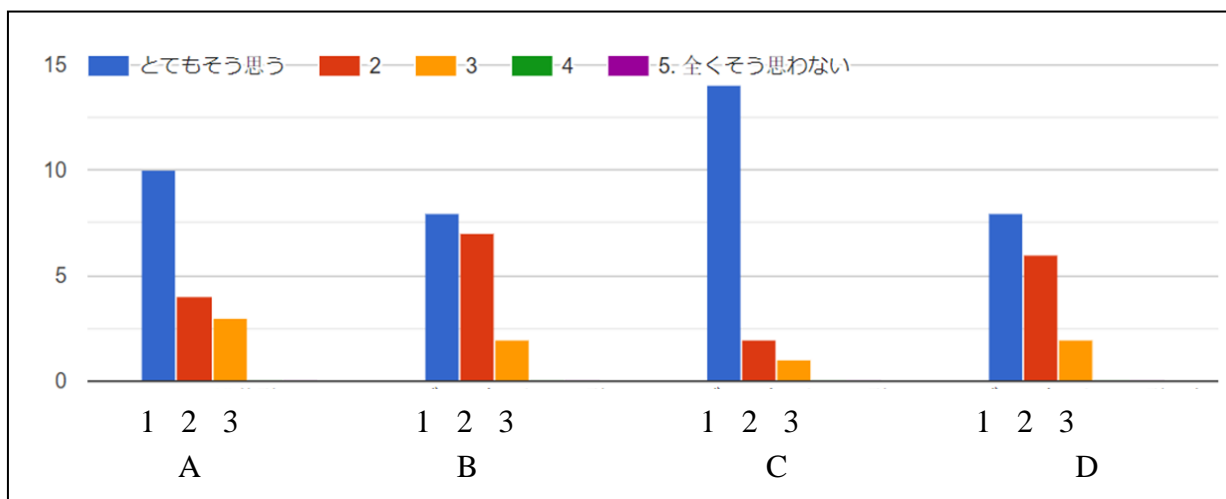


図24 どの形態のセッションが有意義であったか

3.3.3.1 講義型

今回は図22にあるように、ディスカッション型との違いを際立たせるために講義のあと、質疑応答のみで参加者同士のディスカッションは行わなかった。ただし、講義の最中にチャットを用いて意見・質問を表すことを奨励した。回答からは、参加者が、実際の講義に比べて、一方通行感を強く感じたことが見受けられ、参加者同士の意見交換の必要性を述べた回答が多く見られた(①)。同時に、講師への示唆となるような参加者の視点からのコメントもあった(②)。講義の長さ(③)に関しては、二つの回答のみだったが、個人差が見られた。また、自身の気づき(④)にも示されているように、内省の機会になったことが示された。

① 一方通行感・意見交換の重要性

- 相槌や質問が出来ないことから双方向的ではないように感じ、時間が長く感じた チャットの読み書きの同時に進行は難しい
- 全体で話し深める時間が短かった

- テーマを発展させて活動する時間が欲しい
- グループに分かれて感想を言う時間があってもよかった

② 講師への示唆

- パワーポイント右側に余白を残すとチャットと重ならない
- 聞いている人が顔を出している方がいいのかどうか講師の意見を聞きたい

③ 講義の長さ

- 20分は短すぎず長すぎずちょうどいい長さ
- 20分という時間については、テーマから考えると短いのでは。イントロダクションを聞いた、という印象

④ 自身の実践への気づき

- オンラインの講義は集中しにくいことを裏返してみれば、先生の講義を学校や大学でナマで聞くというのは、効果があるのだということを認識した
- オンラインでのセッションでの一人が話す量というのは、会場でナマで聞く場合とは違うことがわかって参考になった。

3.3.3.2. 5人でのディスカッション型

5人でのディスカッション型に対する回答では、発言のしにくさへの言及が多くみられ参加者の戸惑いが見受けられた (①)。その要因として、沈黙の間の悪さと、発言取りの難しさが示されている (②)。また、同時に、その解決法としてファシリテーターの必要性が言及された (③)。このことから、対面式研修会では、5人のグループで話し合う機会も多くあり、その人数が特にストレスとなるとは考えにくいですが、オンライン研修会では、異なるのではないかと思われた。ただし、一つの回答だけであったが、「漫然とした議論になったが、5人でよかった」というものもあり、5人でのディスカッションへの評価は、参加者がどのような議論を期待しているか（幅広い意見を聞きたいのか、または、深く意見交換をしたいかなど）で変わるのではないかと思われる。

① 全体的印象

- 5人は少し人数が多い
- 最初にリーダーを決めたり発言の意思表示の仕方を決めたほうがいい

② 発言しにくさ

- 発話を取るのが難しい
- 誰が話すかで沈黙が起きる
- 参加者の表情や反応が見えにくく発言がかぶったりして話すのを遠慮してしまった
- 最初にウォーミングアップする時間がないと話ができない
- ミュート機能があるので余計に話しだしにくい

③ ファシリテーターの必要性

- ファシリテーター役が必ず必要
- 進行役が成功のポイント
- 仕切る人がいないと発言が回らない
- 初めにファシリテーターが全体発表で発表される方を決めてくれてよかった
- 全員が話せるように時間配分を意識する必要がある

3.3.3.3 3人でのディスカッション型

一方、3人でのディスカッションは、緊張せず、発話を取るときのストレスもなく、気軽で自由な意見交換ができたという回答が大半を占めた。

オンラインの距離感を参加者がどう感じるのかということ、ここでの回答、および、5人のディスカッションでの回答から考えると、オンラインの方が対面式より身近に感じるのではないかと推察された。その要因には、オンラインでは、通常、体全体が見えず肩から上だけが映っている画面で相手と対峙することから「face to face」感が高くなる点、また、自分がまだよく知らない相手の個人スペースの映像が視界に入ることから「intimate」感が感じられる点があるのではないかと考察できる。しかし、実際に対面式とオンラインで参加者がどのような距離感の違いを感じているか、その原因は何かという点に関しては、さらなる調査が必要であろう。

① 発言のしやすさ

- 3人の方がもっと近くにいる感じがして、気軽に話すことができた
- 3人が一番ズームに向いているように思う。(2人よりも、4人よりも)
- 自分だけが話しすぎではいけないと思って緊張することもなく、自分でも言いたいことが言え、ほかの方のお話もしっかり聞くことができた
- 3人の方がゆっくり話せてよかった
- 3人の方が自由な感じで話せ、進行役も不要

② 内容の深化

- 5人グループより発言しやすく、発信&受信したい情報をより多く共有できた
- 3名は、少し掘り下げた内容を討議する上で、ちょうどよい人数
- いろいろな観点から話すことができ、大変有益でした。

3.3.3.4 全体でのディスカッション型

今回のパイロットでは全体でのディスカッションの場として、講義のあとの質疑応答とディスカッション後の共有の時間があつた。回答では、初対面の人たちが多い中で話をするに対する緊張感、および発話を取るタイミングの難しさ、機材操作への不安などの心的負担が示された(①、③)。また、その心的負担を軽減するものとして、ウォーミングアップの奨励とチャット活用が言及されている(②、③)。

① 発言へのしづらさ

- 慣れないと発言しにくい

- 発言するタイミングが、リアルより難しい
- 司会者の指名が必要
- 講義型の後の質疑は十分ほしい
- けっこう緊張した
- 時間の制限、人数制限から、意見があっても言わなくてもいいかと思った

② ウォーミングアップの重要性

- 初対面の人が多かったので、出身地を言うアイスブレイクはよかった
- ディスカッションに入る前に、ファシリテーターが、後から発表する人を誕生日や住居の位置などあらかじめ指示しておく、グループに分かれてからのディスカッションでのウォーミングアップ、及び、発表準備にもなっているのではないかと

③ 機材操作に対する印象

- ミュートの解除と設定によるタイムラグが不自然
- 話を聞きながらチャットするのは初心者には難易度が高い
- 初めてお会いした方と、その方が全員の前で話されたことについて個人間のチャットを続けられたのがよかった

3.3.4. 技術的な問題とオリエンテーションの必要性、および、使用機材の奨励

今回のパイロット研修会では、以下の3つの技術的なサポートを行った。

1. セミナー1週間前からの個人的な「Zoom」接続体験、および接続に問題があった人への個人的サポート
2. セミナー1時間前に行った名前変更など Zoom の使い方に関する「can do check」
3. セミナーの間 必要に応じての対応

これらのオリエンテーションには半数の人が参加しており、全て肯定的なフィードバックがあった。特に、10回以上参加経験のある参加者からは建設的な意見も出された。以下にオンライン研修会への参加経験ごと記す。

① オンライン研修会未経験者

- わかりやすかった
- 研修前に、Zoomの説明があるサイトを2つ事前に見ることができよかった

② オンライン研修会1~4回経験有り

- 名前の変更の仕方がわかった 準備が丁寧で大変わかりやすかった
- 各参加者の予期せぬトラブルへの対応も適切で助かった

③ オンライン研修会10回以上経験有り

- 次々に人が入ってくるとその度に担当者の方が説明し直す必要があるため、オリエンテーションに参加したい人は同じ時間に入るようにしたらどうか

また、研修中の技術的な問題点は、5人から「あった」と回答があった。その問題は、回線の問題、およびスマホ・タブレットからの参加していることに起因していた。このことは、オンライン研修会に参加する際には、LANケーブルを使用し、できるだけコンピュータからの参加を奨励する必要があることを示唆している。

#### ④ 研修中の技術的な問題

「あった」5つの回答より

- 自宅のインターネットの具合があまり良くなかったため、途中で接続が切れた
- 自宅の一時的ネット回線切断
- スマホは簡単に繋がるが、チャットに参加するのが大変

#### 3.3.5. 今後の実施に向けて

今後、研修会が実施されるとして参加を希望するかという質問に対しては、「希望する」が65%であり、「希望しない」は0%であった。また、希望の曜日、および時間帯に関しては「休日の午前中」という回答が82.5%と際立って高かった。

## 4. アンケート分析からの考察と研修会実施案

これらのアンケート結果から、以下の点が確認された。

まず、オンライン研修会の位置づけは、対面式研修会との補完的な役割であることがうかがわれた。そのメリットは、時間的経済的に負担が少なく实际的であり、普段会えない人との交流ができる点であるのに対して、デメリットは、お互いに初対面であることも多くオンラインは対面より距離感がある点、および、テクニカルな面での不安感であった。これらのことから、実際の研修には、話しやすくするための活動、協働作業のための仕掛けが必要であること、さらに、技術的な不安を払しょくするためのサポートが必要であることが示された。

また、オンライン研修会は、インターネットがあれば誰でもアクセスできる開かれた場であること、さらに、参加するだけでなく誰でも企画者・実施者になれることへの肯定的な言及が多く見られ、オンライン研修会への期待感がうかがわれた。さらに、教師会は、オンライン研修会の実施、または、企画しようとする人たちに対する支援などといった活動に、重要な役割を担っているというコメントもあり、今後の教師会の指針への示唆となった。

今後、研修会を企画・実施していくにあたっては、各形態の特徴を理解し、その特性を生かすことが必要であることが確認された。講義型であれば、講義後グループで話し合う時間を十分取ることが必要であること、5人のディスカッション型の場合には、発話取り、緊張感を緩和するファシリテーターが重要であること、3人のディスカッション型は、参加者が話しやすく感じる形態であることからじっくりとテーマを掘り下げる際に有効であること、および、全体で行うディスカッション型では、クイズ的な要素を含めるなど発話しやすい雰囲気づくりや、企画者が一斉にミュートを外すなどの気配りが必要であることなどである。また、どの形態にも当てはまることとしては、テクニカルな面でのサポートの実施、発言者の指名や自由な発言の促しなど

臨機応変に対応するファシリテーターの必要性と、参加者に対して、コンピュータからの参加を奨励することが示された。

以上の結果を鑑み、本プロジェクトでは、休日の午前中に、テクニカルサポートを含めた講義型と3人のディスカッション型の研修会を企画することを考えている<sup>8</sup>。また、対面式研修会でしか経験できないと指摘された交流の深み、話の深化を目指し、本研修会では、放課後の時間を設けることにしたい。

《執筆：櫻井》

## 第五章

### 「日本語教師会 in 欧州」プロジェクトの今後の展望

第一章でも説明したが、「日本語教師会 in 欧州」プロジェクトには二つの目的がある。第五章では、それぞれの活動軸について、今後の展望を見ていく。

#### 1 教師会アンケート実施支援

第二章で紹介したように、自国の教師会会員へのアンケート調査実施に興味、関心のある教師会には、「教師会会員アンケート調査実施マニュアル」を提供したいと考えている。また、アンケート調査の分析に関しては、RAW データの共有が可能であれば、各国の分析をまとめて、ヨーロッパにおける日本語教師会の全体像を見ていくことが、将来的に実現できるのではないかと考えている。そして、その分析を通して、ヨーロッパに住む日本語教師にとって、今後、何が必要なのかを考えていきたい。

#### 2 オンライン研修会実施

本パネルでは、オンライン研修会実施に向けて、オンライン研修会に対する量的調査、質的調査、アンケート調査分析と試験的に行ったオンラインパイロット研修会の実施報告をした。パネル発表後に行われた質疑応答では、フロアからオンライン研修会に関する具体的な提案や講師としての協力意向などが積極的に出された。それらを踏まえて、第四章のまとめでも触れたように 2019 年度内にヨーロッパ発信の国を超えたオンライン研修会の実施を実現したいと計画している。また、オンライン研修会を通して、ヨーロッパの日本語教師のネットワーキングとニーズへの対応をどのように実現することができるかについての調査、分析も検討中である。また、今まで行ってきた教師会アンケート調査分析、オンライン研修会に関する調査分析、実践報告は、今後のプロジェクト活動の指針にするとともに、すべての教師会会員が情報を共有できるように、シンクタンク（プラットフォーム）を作る構想、実現も視野に入れている。

《執筆：鈴木》

注.

<sup>1</sup> ここでいう「ヨーロッパ」とは、国際交流基金の海外日本語教育国別情報の中で「西欧」と

「東欧」のリストにある国を指す。

<sup>2</sup> 興味のある教師会は [kyoushikaiinoushuu@gmail.com](mailto:kyoushikaiinoushuu@gmail.com) にご連絡ください。

<sup>3</sup> ドイツ語圏日本語教育研究会 (Japanisch an Hochschulen (JaH)) :

<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/j-index.php>

<sup>4</sup> ドイツ VHS 日本語講師の会 (Verein zur Förderung des Japanisch-Unterrichts an VHS (VJV)) :

<https://vhsjapanisch.jimdofree.com/>

<sup>5</sup> 以下のサイトを参考に、日本学研究関連の団体を除外してカウントした数字である。(国際交流基金 (2017) 「国別の日本語教育情報>日本語教育国・地域別情報>教師会・学会一覧」  
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/gakkai/index.html> (最終閲覧日: 2019年12月21日))

<sup>6</sup> パソコンやスマートフォンを使いオンラインで会議や研修会を開催するためのアプリケーション

<sup>7</sup> Q7は欠番。

<sup>8</sup> 本パネル終了時に行われた質疑応答の際に具体的な提案があり、2019年11月17日に教師会 in 欧州プロジェクト主催「リテラシーを育てる言語教育」が野山広氏を講師としてお迎えし、ヨーロッパ発オンライン研修会として実施され、予定より多い41名の参加者があった。

<参考サイト> ( ) は最終閲覧日

教師会アンケートサンプル <https://forms.gle/oCHvmU5UFGj3uDMK8> (2020年2月9日)

KH Coder ホームページ <https://kncoder.net/> (2020年2月9日)

<参考文献>

鈴木裕子・近藤裕美子 (2016) 「学び続ける教師を支える日本語教師会の活動意義ースペイン日本語教師会会員への質問紙調査を通してー」, 『ヨーロッパ日本語教育』第20号

鈴木裕子・櫻井直子・高橋希実 (2017) 「ヨーロッパにおける日本語教師会が目指すものは何か?ースペイン・フランス・ベルギーの教師会会員への調査を通して見えることー」, 『ヨーロッパ日本語教育』第21号

高橋希実・近藤裕美子・櫻井直子・鈴木裕子 (2018) 「距離を超えた学びの場の構築ーオンラインで行う目的別教師研修に向けてー」, 『Venezia ICJLE 2018 日本語教育国際研究大会』

<https://www.eaje.eu/media/0/myfiles/icjle2018/icjle-2018-book-of-abstracts.pdf>, pp.325, 326.

樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版